

子どもが忌避される時代

本田 和子著

恐るべき速度で進行している我が国の少子化状況の根本に、子どもを忌避する心性のはたつきをみる、ハッとするような観点だ。この力作評論を読み進めていくうちに、子どもを忌避し、結果として産み育てることを忌避する心性が、一世紀をかけてしだいに強まってきたという事実がみえてくる。

著者はおよそこんなふう述べる。

近代以前の日本社会では、大人と子どもは一つの暮らしを共有していた。大人は子どもを邪魔にしなかった。事実、子どもはどこにでもいた。仕事場にいたかと思うと群れて大通りで遊んでいた。だが人力車や馬車が登場して一転、子どもは道路の邪魔者になった。明治七年に出された道路遊びへの警告は、車優先社会への転換を物



(新耀社・二、八〇〇円)

▼ほんだ・ますこ 31年生まれ。お茶の水女子大学名誉教授。専門は子ども学、子ども史、子ども文化論。著書に『異文化としての子ども』『子別れのフォークロア』『変貌する子ども世界』など。

近代化と共に進んだ囲い込み

語るだけでなく、子どもの安全という名目下に社会という場から子どもを追放するさきがけとなる出来事であった。

大正十三年に始まる児童公園の設置にも同様、安全な遊び場の提供という大義のウラに、目障りになった子どもを囲い込んでおこうという心性を読み取ることができ

る。

学校教育。これも子ども忌避の心性を作り出す大きな要因となった。教育により暮らしの場から切り離され学校へと取り込まれた子どもは、学童や生徒として親の前に現れたのである。以後、親はまったく新しい悩みの種を抱えることになった――。

なるほどと目を開かれる。車社も学校化も近代社会への移行にともなうやむをえない側面である。だがそれを素直に受け入れたということは、私たちが産まないという選択をしてきたことを意味する、と著者は指摘する。茫然とせざるをえない。

ではどうしたらいい？ 処方箋はない。多産化への反転は起こりえないという認識に立って、著者は多産多死の途上国の現実を視野に組み込む。そしてこう記す。産まないという選択は、地球上の産む人と手を携えるという責務と対をなす、と。

評論家 芹沢 俊介